

流れを読む

日本の「ビジョン」

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

デフレ下ながら、日本経済はまた短期循環的回復局面に入ったようだ。成長率は予想を上回り、日経平均株価も昨年四月を底に上昇している。

しかしこれで安心できるような状況ではない。失業率は依然として高く、大学・高校生の就職率は低い。社員のパート化はますます進み、地方経済の悪化も一層深刻化している。日本経済のマクロとミクロの乖離が明確となってきた。大企業の収益向上はリストラによる面が大きい。これはグローバルゼーションで国際競争が激化したからで、この傾向はますます強まってくる。終わりなき大競争に対処すべく企業の国境を越えた活動は一層顕著となり、そのしわ寄せは個人、中小企業、そして地方経済へと広がっている。これは好況という企業収益の上昇が、国民生活の向上に繋がらなくなってきたのであり、むしろ相矛盾するようにさえなってきた。

日本経済を巡る環境が二百年ぶりの「大変化」に直面しているのだ。日本が、西洋文明と接触したのは百五十年前。それよりわずか五十年前から国民国家と産業革命が進行し、国家と経済が一体化する「国民経済」が歴史の方向となっていた。これは誠に日本にとって幸運であった。言語と価値観が同質化している日本にとって追いつ

風が吹いていたのだ。明治維新や第二次世界大戦と大きな苦しみを含めながらも、歴史は常にわれらが味方であった。これがアメリカに次ぐ経済大国日本を作り上げた。

しかし中央集権化が進み、個人も地域も画一化し、没個性化した。長い歴史の知恵たる日本の優れた文化も忘れられていった。特に第二次大戦敗戦後は、冷戦の開始もあってアメリカ依存一辺倒となり、国家の価値観や「利益」が無くなってしまった。一九九〇年を挟んでベルリンの壁とソビエト連邦が崩壊して冷戦は終わった。

ようやく明確となってきた二十一世紀の歴史の方向はグローバルゼーションとアメリカ帝国化である。これは日本が大成功した一国経済中心的な「国民経済」とは全く異なる。むしろ歴史の流れの方向は逆になった。それは当然日本にとって大逆風が吹いてくることになる。中央集権化による効率的工業社会の建設に成功したが、その成功があまりに鮮やかだったため、歴史の大転換期に適応不能を起しているのが現在の日本である。

閉塞状況をどう打開するか。近代化の過程で膨大な官僚群を作り上げたが、それが既得権化して変革を阻んでいるのが明らか。国家改造して歴史の流れに適応していくためには地方分

権化を徹底的に追求して脱官僚を実現しなければならぬ。

日本改革の鍵は二つ。第一は経済の繁栄と国民生活の向上をどう結びつけていくかであり、第二は地方分権を確実に推進して「脱官僚国家」を作り上げることである。この二つの課題を解決できるのは、地域の実質的自立を強力に進める分権国家の確立であり、それが歴史の大変化に対応すべき「国家ビジョン」である。この「ビジョン」は国家を弱めることではなく、むしろグローバル時代に必要な強い国家を目指すものである。経済は主として「地域政府」に任せ、連合体としての国家は機能を集中強化していくことである。その機能とは防衛、外交、情報、通貨政策等である。強い国家を作ることは国民の自信を高め、繁栄へと導く。しかし焦ってはならない。国家ビジョンを掲げ、戦略的、時間的にどう進めていくかが大切。

今回の選挙で争われたマニフェストは「各論」。今緊要な事は「総論」たる国家ビジョン。「分権国家」はわが日本に十分適応性あり。ペリー来航まで日本はそういう国家であった。三百雄藩が切磋琢磨して、繁栄と地域文化を競って作り上げてきていたのだ。